福生の陸上競技

岩下伴蔵

福生市の陸上競技の歴史（戦後のみだが）を考える時、福生町青年団と切り離しては考えられない。また私と青年団の関係を考えても、陸上競技は切り離すことはできない。

以下、福生の陸上競技と青年団（青年団のことは陸上競技が中心となるが）について、記してみる。

一　昭和二十年～二十二年

戦後、橋本孝蔵氏（現、福生市収入役）山崎良之助氏（現、福生市教育委員長）その他の人々が中心となり福生青年団の復興に努力した。熊川地区でも同様の動きがあったことは言うまでもない。

橋本氏等は福生・熊川両青年団の合同を図るとともに、西多摩郡連合青年団（略称、郡団）の結成にも尽力した。郡内の各町村の青年団の合同会に、私も時々橋本氏のお供をして行き、会合の様子を印刷して郡内の各青年団に送った。

また、福生青年団の演芸会の脚本を書いたり、出演したりした。これが、私の青年団との接触

の始まりである。

昭和二十一年、福生・熊川の両青年団が合同して、福生町青年団が発足した。（団長、橋本孝蔵氏）西多摩郡連合青年団（初代団長、石田正義氏、現、奥多摩町教育長）も結成された。

そして、第一回福生町青年団支部対抗陸上競技大会（昭和四十年まで毎年行なわれた）第一回西多摩郡連合青年団陸上競技大会（昭和三十七年まで毎年行なわれた）が開催されたわけである。

昭和二十二年（青年団長、森田正氏）には、青梅断郊競走に福生町青年団からも出場した（平井賢治氏談）。私は、都民体育大会の陸上競技の部に西多摩郡代表として出場し、円盤投で第二位となった。

昭和二十二年には、青梅断郊競走（あと三年ぐらい続いたらしい。平井氏談）の専門外の部で、福生町青年団チームは第二位に入賞している（出場者、平井賢治、笹本巳代治、桜沢正一の三氏）。

二　昭和二十三年～二十六年

竹島益夫、石川保、村野晋三、平井賢治の各団長を中心に、青年団活動は実に活発に行なわれた。陸上競技に関しても支部対抗や郡団の大会の前は、毎晩、出場者は第一小学校、第二小学校または町営グランドで熱心に練習したものである。私も二十三年から二十七年まで、ともに練習をした。身体と身体との接触、私が今でも当時の青年団の方々と交際を続けている一つの大きな

原因だと思っている。

各町村の青年団からの招待リレーや、その他の長距離レースにもよく出場したものである。

昭和二十四年より私は正式に青年団の各種の会合（忘年会とか総会とかその他）に招待されるようになった。

夏の八雲神社の祭礼には、青年団が御輿（みこし）をかついだが、私も昭和二十一年より、仲間に入れてもらってかついでいる。昭和二十六年などは熊川のどこかの部落の御輿を夜祭の時かつぎまわり、翌朝眼をさました所が平井団長宅。ハンテンをきたままの姿であった。途中何回か休んだこともあるが、昨年（昭和四十五年）も長沢の御輿をかつがせてもらった。四十九歳になってもこの楽しみがあるのは、青年団とおつきあいをしてきたおかげであり、心より感謝している。

昭和二十五年（村野晋三団長）から、支部対抗駅伝競走大会が開催された（昭和三十八年まで続いた）。五日市町折返しのレースであった（のちには福生町内一周となった。また中学生も参加するようになった）。

私の陸上競技の成績は次の通りである。

昭和二十三年

日本学生　円盤投三位

日本選手権　ハンマー投六位

昭和二十四年

日本学生　円盤投二位　ハンマー投二位

日本選手権　ハンマー投四位

昭和15年全国中等大会円盤投優勝の筆者（中央カップを持つ）

東西対抗　ハンマー投四位

昭和二十五年

日本学生　ハンマー投五位

国民体育大会　ハンマー投六位

武蔵野市の陸上競技場で行なわれた東西対抗に出場した時は、石川保、平井賢治、中村益夫、斎藤巽、横田邦夫、青山実その他多数の青年団関係者が私の応援に来てくださったことは今でも忘れられないことである。この時は、当時私の奉職していた福生第一小学校の職員と児童も応援にきてくださった。なお第一小学校の先生方は、私が陸上競技の大きな大会に参加する時は、いつでも遠征資金カンパをしてくださった。私は人の情のありがたさというものを

一生忘れないつもりである。

三　昭和二十七年～三十年

福生町青年団支部対抗陸上競技大会の結果をみて、西多摩郡連合青年団陸上競技大会の出場選手を決定するわけである。しかし支部対抗で優秀な成績をあげた者でも、いろいろのつごうで、郡団の大会に出場しない場合がある。福生町青年団の団長以下役員は、毎年のように何日も夜おそくまで、郡団大会出場をお願いするために、優秀選手の所へ出かけるわけである。私も毎年そのおともをしてきたが、大変な仕事である。

昭和二十七年（細淵万吉団長）二十八年（野崎博団長）は、優秀な記録をもつ選手が数多く郡団大会に出場し、二年連続準優勝という栄誉をかちとった年である（それまではよくても四位）。

それとともに、青年団としてまとまって陸上競技の練習をしていた者より、高校の陸上競技部にはいって練習している者が、町代表の選手の中に数多くはいってきたことも、準優勝の原因といえると思う。

もちろん、町を代表するのであり、青年団としては、合同の練習会なり、ミーティングを開催したことは言うまでもない。

昭和二十九年（設楽清一団長）の郡団大会の折には、優秀な記録をもっている者が多数欠場し

て、福生町青年団の成績は第五位となってしまった。

この年は、五月二十三日に福生町青年団陸上競技記録会というのを、青年団のOBが主催して開催している。その理由は、支部対抗が毎年秋であり、春は駅伝のほか陸上競技の試合がないので、春にも競技会を設け、選手の資質の向上をはかるためであった。そして、あわよくば郡団大会で優勝をと願ったわけであるが、前記のような事情で第五位となったわけである。

なお、今まで書き忘れていたが、支部対抗陸上競技大会や駅伝競走大会等の審判は、主として青年団OBがあたっているわけである。

なお二十九年末で、戦後福生町青年団陸上競技十傑表を笹本巳代治氏が作成した。非常に参考になるものと思う。

福生町青年団陸上競技十傑表

摘要

七郡＝第七回西多摩郡連合青年団陸上大会の略

八支＝第八回福生町青年団支部対抗陸上大会の略

町営グ＝福生町営グランドの略

一〇〇米

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	一一、九	笹本巳代治	二五、六、一八	第二回西多摩選手権	青梅小
一	一一、九	野島　昇	二六、九、一六	六支	町営グ
三	一二、〇	桜沢　正一	二四、九、一八	四支	〃
三	一二、〇	清水　勇司	二七、九、一四	七支	〃
三	一二、〇	平原　任司	二九、九、一九	九支	中学グ
六	一二、三	高須　喜彦	二七、九、一四	七支	町営グ
六	一二、三	田村　洋三	二七、九、一四	七支	〃
六	一二、三	乙津　房三	二七、五、二三	記録会	〃
六	一二、三	森田　貞蔵	二九、九、一九	九支	中学グ
六	一二、三	橋本　硝学	二九、九、一九	〃	〃

二〇〇米

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	二四、八	笹本巳代治	二八、一〇、一八	八支	町営グ
二	二五、四	野島　昇	二七、九、一四	七支	〃

三	二五、五	田村　洋三	二九、一〇、二四	九郡	町営グ
四	二五、六	清水　勇司	二七、九、一四	七支	〃
四	二五、六	森田　貞蔵	二八、九、一三	八支	〃
六	二五、八	桜沢　正一	二六、九、一六	六支	〃
七	二五、九	森田　寛	二九、九、一九	九支	中学グ
八	二六、〇	乙津　房三	二六、九、一六	六支	町営グ
八	二六、〇	橋本　硝学	二八、九、一三	八支	〃
十	二六、一	平原　任司	二九、九、一九	九支	中学グ

四〇〇米

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	五六、八	森田　寛	二九、一〇、一九	七郡	町営グ
二	五七、〇	斎藤伊佐男	二七、九、一四	七支	〃
三	五八、六	笹本巳代治	二五、一〇、二三	五郡	青梅小
四	五八、七	村野　政則	二九、九、一九	九支	中学グ
五	五八、八	野島　昇	二六、九、一六	六支	町営グ
六	五八、九	森田　貞蔵	二九、九、一九	九支	中学グ

七	五九、〇	清水　勇司	二七、九、一四	七支	町営グ
八	五九、五	秋山　彬	二九、九、一九	九支	中学グ
九	五九、八	設楽　平二	二六、九、一六	六支	町営グ
十	六〇、〇	中野　勇	二九、九、一九	九支	中学グ

八〇〇米

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	二、一一、七	森田　寛	二八、一〇、一八	八郡	町営グ
二	二、一五、二	斎藤伊佐男	二七、九、一四	七支	〃
三	二、一七、三	中村　益雄	二六、九、一六	六支	〃
四	二、二一、〇	中込舜一郎	二八、九、一三	八支	〃
五	二、二三、〇	小泉　柾夫	二九、九、一九	九支	中学グ
六	二、二三、六	田村　辰夫	二六、九、一六	六支	町営グ
七	二、二四、〇	山崎　晴男	〃	〃	〃
八	二、二四、四	瀬古　秀雄	〃	〃	〃
九	二、二四、六	村野　政則	二九、九、一九	九支	中学グ
十	二、二四、八	田中　潔	二六、九、一六	六支	町営グ

一、五〇〇米

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	四、四三、三	小泉　柾夫	二九、九、一九	九支	中学グ
二	四、四三、四	島田三喜男	二七、一〇、一九	七郡	町営グ
三	四、四五、八	荒畑　道男	二九、九、一九	九支	中学グ
四	四、四八、〇	中村　益雄	二五、一〇、二二	五郡	町営グ
五	四、四九、九	田中　梅夫	二九、九、一九	九支	中学グ
六	四、五五、一	池上　昭治	二九、九、一九	九支	〃
七	四、五五、二	中村　貞夫	二七、九、一四	七支	町営グ
八	四、五六、二	野崎　博	二六、九、一六	六支	〃
九	四、五八、六	村野　俊三	二六、九、一六	〃	〃
十	五、〇〇、五	吉野　志良	二七、九、一四	七支	〃

砲丸投

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	一二、〇〇	井上　威	二九、五、二三	記録会	町営グ
二	一一、二五	篠沢　茂	二九、九、一九	九支	中学グ

三	一一、一八	村野　和夫	二七、九、一四	七支	町営グ
四	一一、〇〇	平井　賢治	二六、九、一六	六支	〃
五	一〇、三三	篠崎　忠男	二九、九、一九	九支	中学グ
六	一〇、二一	山下　幸三	二七、九、一四	七支	町営グ
七	一〇、〇八	石川　泰一	二九、九、一九	九支	中学グ
八	九、九七	斎藤　恒幸	二九、九、一九	〃	〃
九	九、九二	森田　安明	二九、九、一九	〃	〃
十	九、九〇	乙津　房三	二七、九、一四	七支	町営グ

円盤投

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	二七、四九	井上　威	二九、八、一九	九支	中学グ
一	二七、四九	篠沢　茂	〃	〃	〃
三	二五、七七	笹本巳代治	二九、五、二三	記録会	町営グ
四	二四、五七	平井　賢治	二六、九、一六	六支	〃
五	二四、五四	村野　和夫	〃	〃	〃
六	二四、一〇	設楽　清一	〃	〃	〃

七	二三、八二	森田　房夫	二六、九、一六	六支	町営グ
八	二三、五四	乙津　房三	二七、九、一四	七支	〃
九	二一、五三	斎藤　恒幸	二九、九、一九	九支	中学グ
十	二一、三二	窪田　博成	二六、九、一六	六支	町営グ

走幅跳

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	六、〇三	森田　房夫	二五、九、一〇	五支	町営グ
二	五、八五	平井　賢治	〃	〃	〃
三	五、六四	佐藤　豊	二八、一〇、一八	八郡	〃
四	五、五九	笹本巳代治	二七、一〇、一九	七郡	〃
五	五、四九	村野　和夫	二六、九、一六	六支	〃
六	五、三四	竹田　憲二	二九、九、十九	九支	中学グ
七	五、二九	村野　忠	〃	〃	〃
八	五、二六	高須　喜彦	二六、九、一六	六支	町営グ
九	五、二五	平原　任司	二九、五、二三	記録会	〃
十	五、一八	桜沢　正一	二六、九、一六	六支	〃

三段跳

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	一二、七九	森田　房夫	二六、九、一六	六支	町営グ
二	一二、〇八	笹本巳代治	〃	〃	〃
二	一二、〇八	野島　昇	二七、一〇、一九	七郡	〃
四	一一、八九	佐藤　和利	二九、九、一九	九支	中学グ
五	一一、七三	竹田　憲二	二七、九、一四	七支	町営グ
六	一一、二一	金子　泰雄	二六、九、一六	六支	〃
七	一〇、八九	佐藤　豊	二九、九、一九	九支	中学グ
八	一〇、八八	井上　久男	〃	〃	〃
八	一〇、八八	村野　吉蔵	二七、九、一四	七支	町営グ
十	一〇、七五	村野　忠	二九、九、一九	九支	中学グ

走高跳

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	一、六五	中村　実	二六、一〇、二一	六郡	五日市小
二	一、六三	篠崎　忠男	二九、九、一九	九支	中学グ

二	一、六三	佐藤　和利	二九、九、一九	九支	中学グ
四	一、五八	平井　賢治	二五、九、一〇	五支	町営グ
四	一、五八	篠崎　茂	二九、九、一九	九支	中学グ
四	一、五八	井上　久男	〃	〃	〃
七	一、五七	森田　房夫	二六、九、一六	六支	町営グ
八	一、五五	守屋　陽一	〃	〃	〃
九	一、五〇	村野　喜男	〃	〃	〃
九	一、五〇	設楽　平二	〃	〃	〃
九	一、五〇	斎藤　巽	二七、九、一四	七支	〃
九	一、五〇	安藤　源	〃	〃	〃
九	一、五〇	木場本芳治	二九、九、一九	九支	中学グ

一〇、〇〇〇米

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	三六、一六、〇	野崎　博	二六、九、一六	六支	町営グ
二	三六、二五、八	島田三喜男	二七、九、一四	七支	〃
三	三六、五二、〇	中村　貞夫	〃	〃	〃

四	三七、一一、〇	渡辺日出男	二六、九、一六	六支	町営グ
五	三七、二三、〇	田中　梅夫	二七、九、一四	七支	〃
六	三七、三二、〇	森田　保	二七、九、一四	〃	〃
七	三七、四五、〇	小泉　柾夫	二九、一〇、二四	九支	〃
八	三七、五二、〇	長谷川尚孝	二六、九、一六	六支	〃
九	三八、〇六、〇	池上　昭治	二六、九、一六	〃	〃
九	三八、〇六、〇	高橋　俊三	二七、九、一四	七支	〃

八〇〇米継走

一位	一、四一、一	福生町青年団チーム	二八、一〇、一八	八郡	町営グ

笹本巳代治、田村　洋三、森田　貞蔵、野島　昇

一〇〇米

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	一四、三	平井　常子	二五、一〇、二二	五郡	青梅小
二	一四、九	野島　和子	二九、一〇、二四	九郡	町営グ
三	一五、一	吉川千代子	二九、九、一九	九支	中学グ
三	一五、一	原島　卓江	二九、九、一九	九支	中学グ
三	一五、一	森田　芳江	〃	〃	〃
六	一五、二	森田千代子	〃	〃	〃
七	一五、四	瓜生　清子	〃	〃	〃
八	一五、七	設楽てい子	二六、九、一六	六支	町営グ
八	一五、七	笹本　久子	二七、九、一四	七支	〃
十	一五、八	岡野　米子	〃	〃	〃

二〇〇米

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	三〇、二	平井　常子	二六、一〇、二一	六郡	五日市小
二	三二、二	森田千代子	二八、一〇、一八	八郡	町営グ
三	三三、〇	原島　卓江	二九、九、一九	九支	中学グ
四	三三、三	森田　芳江	〃	〃	〃
五	三三、四	吉川千代子	二八、九、一三	八支	町営グ
六	三三、五	清水カオル	二九、九、一九	九支	中学グ
七	三三、六	岡野　米子	二七、九、一四	七支	町営グ

八	三三、七	井上　喜	二七、九、一四	七支	町営グ
九	三四、三	塩野美恵子	二八、九、一三	八支	〃
十	三四、五	井上喜美子	二六、九、一六	六支	〃

砲丸投

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	八、三三	吉川千代子	二六、一〇、二一	六郡	五日市小
二	八、二九	森田　綾子	二四、五、一	春季陸上競技大会	福一小
三	七、八九	杉森　和子	二九、九、一九	九支	中学グ
四	六、九五	加藤　和子	二六、九、一六	六郡	町営グ
五	六、九四	高橋　園子	二九、九、一九	九郡	中学グ
六	六、八〇	高橋　重子	二八、九、一三	八郡	町営グ
七	六、七六	細淵　利子	二六、九、一六	六郡	〃
八	六、七一	内山　節子	二九、九、一九	九支	中学グ
九	六、六八	渡辺ハツ子	二七、九、一四	七支	町営グ
十	六、六四	村山　和子	二八、九、一三	八支	〃

走幅跳

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	四、〇五	笹本　久子	二八、一〇、一八	八郡	町営グ
二	三、九三	川辺　正子	二九、九、一九	九支	中学グ
三	三、九一	野島　和子	〃	〃	〃
四	三、九〇	清水　広子	〃	〃	〃
五	三、八三	中村　松子	二五、九、一〇	五支	町営グ
六	三、八二	設楽てい子	二六、九、一六	六支	〃
七	三、八一	平井　常子	〃	〃	〃
八	三、八〇	小林　弘子	二九、九、一九	九支	中学グ
九	三、七六	森田千代子	二六、九、一六	六支	町営グ
十	三、七一	森田　芳枝	二九、九、一九	九支	中学グ

走高跳

順位	記録	氏名	年月日	大会名	場所
一	一、三八	森田千代子	二九、九、一九	九支	中学グ
二	一、二八	杉森　和子	〃	〃	〃

三	一、二三	中村　松子	二五、	九、一〇	五支　町営グ
四	一、二〇	瓜生　清子	二九、	九、一九	九支　中学グ
五	一、一八	森田とし子	二六、	九、一六	六支　町営グ
五	一、一八	二見喜美代	二六、	九、一六	〃　〃
五	一、一八	設楽てい子	二九、	九、一九	九支　中学グ
九	一、一五	町田カツ子	〃	〃	〃　〃
九	一、一五	出本　道子	二六、	九、一六	六支　町営グ
九	一、一五	長岡　和子	〃	〃	〃　〃
九	一、一五	石川くに子	二七、	一〇、一	記録会　福二小
九	一、一五	尾作　静子	二七、	九、一九	七支　町営グ
九	一、一五	内田　礼子	二九、	九、一九	九支　中学グ
九	一、一五	吉田キヌエ	二九、	九、一九	〃　中学グ

四〇〇米継走

五九秒五	福生町青年団チーム	二七、一〇、一九	七郡	町営グ
平井　常子、吉川千代子、岡野　米子、笹本　久子				

支部対抗記録

一分三秒六	第三支部チーム	二九、	九、一九	九支　中学グ
森田千代子、吉川千代子、岡野　米子、森田　芳枝				

なお、此の十傑表は昭和二十六年度以前の記録が資料不足のため確認いたしたもののみに依って決定いたしましたので、相当の記録を出した人も多々ございましたが、資料未確認のため記録に残すことが出来ません。ただし、資料を確認いたし次第これを認めることになっておりますので、係まで（笹本巳代治）ご提出下さるようお願いいたします。

昭和二十九年十一月十日

昭和三十年（笹本巳代治団長）の郡団大会での成績は、準優勝であった（男子の部二位、女子の部優勝で総合は二位）。

四　昭和三十一年～三十五年

福生町青年団長は二十一年より三十年まで、毎年交替していた。しかし、一年で団長をやめなければならないという規則もなし、何年か続けて団長をやる人がいないものかという声はかなり

前からあった。

この声にこたえたかのように、田村修一氏は昭和三十一年より三十三年までの三年間、青年団長として活躍した。

青年団の陸上競技の成績は、郡団大会においては、三十二年七位、三十三年四位であった。（三十一年は不明）

郡団大会における福生町青年団の陸上競技の成績は、三十四年七位、三十五年準優勝である。団長は石川慶一郎氏が二年続けてうけもっている。

三十五年の郡団大会では、新記録が四つ生まれたが、そのうち三つは福生町青年団が樹立したものであり、その種目、氏名、記録は左の通りである。

男子走高跳　木場本弘治　一米八十
同　　瓜生　喜蔵　一米七十
女子走高跳　森田佐知子　一米三十八

註　瓜生喜蔵氏（現、東急勤務）は棒高跳においては日本を代表する大選手となった。瓜生氏については後述する。

特筆すべきことは、三十五年四月、青年団のOBを中心に、これにOB以外の陸上競技愛好者が集まって、福生町陸上競技協会を結成したことである。そして福生陸上競技選手権大会を開催

し（以後毎年開催）陸上競技の向上に努力しているわけである（初代会長、平井賢治氏）。

さらに同年、福生町体育協会も結成された。体協結成の発起人は、橋本兵五郎氏（当時、町教育長）貫井喜代次氏（当時、町総務課長）平井賢治氏と岩下伴蔵すなわち私の四人であった。初代会長には当時福生町長の秋山誠一氏が就任した。

陸協のことについては後にくわしく記することにする。

五　昭和三十六年～三十七年

数年前から地域青年団としてのまとまりや活動ぶりは、福生町青年団が西多摩郡内では最上位となっていた。

そして昭和三十六年（森田和一団長）の西多摩郡連合青年団陸上競技大会においても、わが福生町青年団はついに優勝の栄誉に輝いたのである。しかも総合優勝・男子優勝・女子優勝の完全優勝をなしとげたのである。

このことについては、三十六年の青年団の団報（『理想』）紙上にくわしく記してあるのでその記事を再びここにのせてみる。

第十六回西多摩郡連合青年団

陸上競技大会

（各種目記録）

（女子）

一〇〇米　岡野美岐子　十四秒六
二〇〇米　松永豊子　二十九秒七　中村ケイ子　三十二秒四
走幅跳　森田佐知子　四米四十一　松永豊子　三米三十九
走高跳　森田佐知子　一米二十五　岡野美岐子　一米二十五
砲丸投　高橋その子　七米八十七　吉川孝子　六米十一
四〇〇米継走　松永・岡野・中村・森田　五十八秒九

（男子）

一〇〇米　新海捷治　十二秒一　山田和久　十二秒五
二〇〇米　新海捷治　二十四秒九　山田和久　二十六秒〇
四〇〇米　井上聡　五十七秒五　小泉英機　一分〇秒三
八〇〇米　守屋速男　二分三十秒六　小泉英機　二分三十二秒三
一、五〇〇米　石川好男　四分三十一秒三　小池和重　五分六秒〇

五、〇〇〇米　石川好男　十六分二十四秒四　小池和重
走幅跳　佐々木良弘　五米七十八　坂本英雄　五米六十六
走高跳　瓜生喜蔵　一米七十三　井上孝　一米六十五
三段跳　瓜生喜蔵　十三米四〇　坂本英雄　十二米二十四
砲丸投　木場本芳治　十四米六十二　木場本征二　十三米九十四
円盤投　木場本征二　三十六米六十八　木場本芳治　三十四米二十四
八〇〇米継走　新海・山田・瓜生・井上（聡）　一分四十三秒〇

大会新記録

木場本芳治　砲丸投　十四米六十二
木場本征二　円盤投　三十六米六十八

（以上二名）

大会タイ記録

松永　豊子　二〇〇米　二十九秒七　（以上一名）

最優秀選手

男子　木場本芳治（福生）
女子　該当者なし

〈福生町青年団々報『理想』より〉

西多摩郡連合青年団対抗陸上競技大会

戦後初優勝を祝して

岩下伴蔵

第十六回西多摩郡連合青年団対抗陸上競技大会は、十一月五日（日）晴天下の福生中学校々庭で開催された。

戦後、福生町青年団は、先輩各位の努力でいつも好成績を収めていた。しかしながら、未だ優勝を達成することが出来ず、毎年、無念の涙をのんできたのである。昨年のごときは、事故さえ、おきなければ、優勝というところまで行ったのだったが……。

ＯＢ連中が中心となり、昭和三十五年度に福生町陸上競技協会を結成した目的の一つは、協会の活動を通して、有望選手を発見し、更に協力して、本大会での優勝達成に貢献しようということであった。

本年度の大会に栄ある福生町青年団の選手として出場した人々は、三十五年、三十六年両年度の青年団支部対抗陸上競技大会、福生陸上競技選手権大会、更に本年度の福生町一般対高校生の

陸上競技大会に出場して活躍した選手達であった。（この点、福生町陸上競技協会は、その目的の一つを本年において達成したと言えよう）

本年度、優勝という栄誉のかげには、団長をはじめ、青年団幹部諸氏の並々ならぬ努力があったことは、言うまでもない。町長さんはじめ町民各位の絶大な御支援も優勝の一大原動力であった。

もちろん、選手諸氏の奮闘を忘れるものではない。以下、当日の活躍を中心として、記してみる。

男子一〇〇米及び二〇〇米に最高記録で優勝した新海君の活躍は、これこそ闘魂の勝利と言えるものである。練習不足の為、自己最高記録を出すことは、できなかったが、山田君もよく健闘してくれた。

四〇〇米で一位の井上聡君は見事なストライド走法をみせてくれた。今後の向上が期待される。不得手な四〇〇米、八〇〇米に腹痛をおして活躍した小泉英機君（一〇〇米、二〇〇米が専門である）と、やはり専門外の八〇〇米で健闘した守屋君は力の及ぶ限り最後まで頑張るというスポーツマン・シップを発揮したものと言えよう。

一五〇〇米、五〇〇〇米に最高記録で堂々と優勝した石川君は、日頃の錬磨をそのまま示したものであり、練習のいかに大切であるかを証明している。また、八〇〇米が専門でありながら、

一五〇〇米、五〇〇〇米を初めて走り、しかも好成績をあげた小池君の闘志を賞讃したい。専門外でも出場して頑張るという小池君や前記の小泉、守屋両君等の存在が、優勝に大きく貢献しているのである。

走幅跳、三段跳に活躍した坂本君は、進学準備の為練習不足にもかかわらず、よくその素質を生かしたものである。走高跳の井上孝君は勤めの身にもかかわらず、見事、自己の最高記録を出す奮闘ぶりであった。走幅跳の佐々木君もようやく大器の片りんをみせてくれた。三段跳、走高跳の瓜生君は本年度秋田で行なわれた国民体育大会の高校生の部の棒高跳で三位に入賞した実力の持主である。走高跳では、はじめつまずいたが、最後には、最高記録で優勝、その美しいフォームで観衆の拍手を浴びた。まさに貫録を示したものといえよう。

砲丸投、円盤投に兄弟で優勝した木場本芳治、征二の両君は、芳治君が砲丸投で征二君が円盤投で大会新記録を樹立した。兄の芳治君は最優秀選手賞をも獲得している。この二人の快記録は見映えのしない投てき競技を見ごたえのあるものにしたが、両君の実力からして、期待していたとおりの、見事な活躍である。

八〇〇米継走は戦後一度も一位になったことのない種目であったが、新海、瓜生、井上聡、山田四君の力走は二位を二〇米も引き離すほど見事なもので、最高記録でテープを切った。個々の実力の他に、チームワークのよさを示している。

女子一〇〇米の岡野さんは他をよせつけず最高記録でテープを切り、更に走高跳でも、一位を獲得している。日頃の練磨のたまものである。

二〇〇米と四〇〇米継走に活躍した中村さんは、当初出場を予定していなかった種目であるが、その実力で立派にその責を果たしてくれた。補欠で出場しても、一位をとるほど選手の層が厚くなっていることは、喜ばしいことである。

走幅跳に思わぬつまづきをみせた松永さんも、二〇〇米では堂々と大会タイ記録で優勝して、その実力を発揮した。岡野さんと共に今後の進歩が期待される人である。

走幅跳、走高跳の森田さんは、練習不足にもかかわらず共に最高記録で優勝して郡下の女子選手の第一人者である貫録を堂々と示した。

砲丸投の吉川さんは、勤務中であったが、責任者の許可を得て出場し、終わると直に職場にもどったもの。このようにして健闘してくれた気持ちを本当に有難く思う。

なお砲丸投の高橋さんは、本年は競技生活を止めていたのだが、どうしても人がいなくて、困っている青年団幹部の様子をみて、それではと出場したもの。そして出場するからには一位をとりたいと言っていたが、その闘志で見事一位を獲得している。

四〇〇米継走の松永さん、岡野さん、中村さん、森田さんのメンバーは優勝が当然である。しかし、団の優勝の為、着実なバトンタッチを心がけ実行して、テープを切ってくれた。団の為に

という、この心持ちを大いに賞したい。

戦後、福生町青年団としての初優勝が、男子優勝、女子優勝、総合優勝という、完全優勝であったということは、福生町青年団の実力をいかんなく発揮したものと言えよう。

なお、選手以外の団長以下の幹部諸団員の活躍ぶりや、その労苦も、選手達に劣らぬものがあったが、それについては、くわしく書く枚数もないので、感謝の念をあらわして筆をおく。

なお、当時の青年団活動の様子を知ることも陸上競技の成績と無縁ではないと思うので、三十六年の青年団の年間行事報告をのせておく。

昭和三十六年度行事報告

四月一日　事務引継会

十六日　支部対抗駅伝大会

五月一日　赤十字募金集め

七日　文化部ハイキング西秋留丘陵

十四日　入団式、福青だより、団員名簿発行、約百名の新入団員を迎え、ニュー福生において行なう

二十日　女子部十日会第一回

二十八日　支部対抗野球、排球大会

六月四日　福生陸上競技選手権大会に参加す

十七日　レコード・コンサート

福青だより第二号発行

十八日　春季美化運動

二十四日　歴代団長を囲む会

二十九日・三十日　十日会主催のアンダリヤ編物講習会　講師　堂田きよ子先生

三十日　夏祭り打ち合わせ会

七月一日　盆踊り練習始める

九日　盆踊り櫓建て

十三日　盆踊り大会始まる

二十日　第三回十日会

八月一日　夏祭り

十日　第四回十日会

二十日　料理講習会　講師　園花ふじ先生

二十六日・二十七日　幹部講習会　講師　坂川山輝夫先生　羽村清流荘にて

二十八日　運動会資金集め始める
九月三日　養老院慰問、多西の松楓園
十日　公園清掃
十七日　総務、支部長懇談会
十八日　フォーク・ダンス練習始める
十九日　第五回十日会
二十四日　支部対抗陸上競技大会
二十五日　福青だより第三号発行
十月十四日　第六回十日会
荻村選手一行卓球模範試合見学
十五日　五日市町青年団陸上競技大会、招待リレーに参加
二十九日　支部対抗卓球大会
十一月五日　西多摩郡連合青年団陸上競技大会、於福生町立中学校々庭
福生町青年団優勝
十一日　レコード・コンサート
十六日　第七回十日会　岩下先生を囲んで

十九日　バス旅行　箱根へ
二十五日　支部長連絡会　忘年会
十二月六日　団報『理想』の編集会
十日　第八回十日会
十五日　忘年会　『理想』発行

続いて昭和三十七年（木村輝幸団長）の郡団大会においても、福生町青年団は完全優勝をとげている。

青年団の各種会合に出席するだけでなく、郡団大会の選手選定や選手団の監督として永年関係してきた私は、昨年の郡団大会優勝の時は本当にうれしかった。自分の永年の夢がかなうということは、このような気持ちなのかと喜びをかみしめたものである。本年の連続優勝の喜びのあとは、よし、来年も必ず優勝して三連勝を達成しなければと、新しい構想をねりはじめたものである。

だが伝統ある西多摩郡連合青年団陸上競技大会は三十七年の第十七回大会を最後に、翌年からは姿を消し去ったのである。

だが、西多摩郡の陸上競技向上のためにつくした郡団大会の功績は、永久に残るものと思う。

単に陸上競技向上だけでなく多くの関係者の間の人間関係をよくするために、計り知れない功績があったと思う（このことは青年団のすべての行事等について言えることであるが）。

私も青年団とおつきあいできたことが、多くの知人知己を得るうえで、さらに自分の人間としての向上のために、非常に役立ったと今でも感謝している。教育者としての道を歩む上にも、大変よい経験であったと感謝している。同様のことが陸上競技についても言えるわけである。

六　昭和三十八年～四十年

昭和三十八年（森田皓大団長）には、福生町青年団の支部対抗駅伝競走大会と支部対抗陸上競技大会は開催されている（駅伝は本年が最後となった）。

三十九年（木村剛毅団長）四十年（細谷幸次団長）には、支部対抗陸上競技大会のみ行なわれた。

もちろん福生町陸上競技協会の主催する福生陸上競技選手権大会には、青年団員が多数出場してきたし、四十一年以降も出場しているので、青年団員と陸上競技の縁が切れてしまったわけではなかったのだが……。

支部対抗陸上競技大会は、初期中期は純粋に陸上競技種目だけの大会であったが、三十五年頃より、他の種目（たとえば、パンくい競走とか、百足競走とか、紅白球入れとか、フォークダンスとか）もおいおい加わってきて、小学校の運動会のように、団員全体が参加して、にぎやかにお祭り気分

で楽しむというような大会に変化してきている。これはこれで青年団の団員全体が楽しむ行事としてよいことだと考えている。

そして、このような変化は、やがて消滅する福生町の地域青年団体に対する挽歌であったと私は感じている。

七　福生市陸上競技協会

陸協の歴史を語るには、まず青年団のOB会からはじめなければならない。

青年団役員のOBは、青年団の支部対抗の駅伝競走や陸上競技大会の審判やその他青年団の後援を行なってきた。そしていつの間にか会を持つようになった。

OB会という形をもつようになったのは、昭和二十六年頃と思う（初代会長石川保氏と記憶している）。

昭和三十四年平井賢治会長の時、規則が出来て、OB会の目的も「会員相互の向上親睦と青年団の後援」と明確になってきた。数年後OB会という名称は「福王会」と改称されたが、現在も会は存在し活躍している。

このOB会の会員全員と、その他の陸上競技愛好者が集まって、昭和三十五年四月、福生町陸上競技協会を結成したわけである。

三十四年には第十四回国民体育大会が東京で開催され、前開催地の富山から国民体育大会旗がリレーされ国立競技場へはいることになった。

途中十月二十三日には、この大会旗が昭島より福生を通過し羽村町へ進むことになり、福生町からも旗リレー隊員が選抜された。

福生町境――牛浜十字路まで一隊、牛浜十字路より羽村境まで一隊の計二隊であり、一隊は二十一名編成であった。前の隊の隊長は平井賢治氏、あとの隊の隊長は設楽清一氏であった。

この隊の大部分は青年団のOB会員であり、あと小中学校の教師等も参加した。この隊員は翌年福生町陸協の会員となったものであり、この国体旗リレーも福生の陸上競技を盛りあげる一因となっていよう。

昭和三十九年のオリンピック東京大会の聖火リレーも福生を通過している。

十月八日、羽村境より牛浜十字路までは福生の走者が走った。正走者は瓜生喜蔵君、副走者は石川好男君、（あと一名は欠）随走者二十名の編成であった。随走者の大部分は陸上競技関係の若人であった。

この聖火リレーは、スポーツ興隆に非常に成果をあげたものと思う。私も実行委員として走者の練習その他の指導にあたったが、生涯忘れられない思い出である。

福生町陸上競技協会の事業は、福生選手権開催を中心に、各種競技の審判（日本学生マラソン、

日本選手権競歩その他）を行なったり、福生断郊競走大会を主催したりしている。この間会員は公認審判員の免状を取得している。

陸協創設当時は、平井会長および橋本孝蔵、岩下伴蔵の二副会長以下の構成であった。しかし平井会長は四十五年町体育協会長就任のため、陸協会長を辞任したので、現在は橋本孝蔵氏（現、市収入役）が会長となり、副会長、笹本巳代治氏以下、河辺秀吉氏、桜沢正一氏、田中潔氏等の油の乗り切った人達が先頭に立って活躍している。

陸協については、種々の方々の御援助があるわけであるが、特に田村匡雄（現、市議）大野忠一（現、市企画調査室長）両氏の名は忘れることができない。

昭和四十五年七月一日市制施行により、福生町が福生市となった。町陸協も福生市陸上競技協会となったわけである。

市制施行を記念して、市陸協主催の第一回福生ロードレース大会を行なったし、市民総合体育大会の陸上競技の部の主管も行なった。

十月十七日の市民総合体育大会陸上競技の部には、中学生をはじめ実に二〇四人の選手が出場し非常な盛況であった。走高跳で木場本征二君が一米九十を見事にクリヤーして、二米の高さのバーにいどんだわけだが、これを見ていた人達には、いつまでも忘れられない光景となろう。

むすび

はじめ、私自身の陸上競技のことをという注文を受けたが、『ふっさっ子』に載せるものとしては、福生の陸上競技についての方がふさわしいだろうと、このような文を書いたわけである。

私自身のことも入れさせてもらったが、陸上競技以外の青年団のことも自然に入ってしまったわけである。

私としては、教育のことに関して書きたいという念もあった。それはいつかまた機会があるかも知れないと思っている。

この文を書き終えるころになって、つくづく人と人との心のふれあいということを考える。『ふっさっ子』に語られる人々のふれあいは、福生という市を成立させている大きな要因の一つではなかろうか。どこの町にも村にも、そこの人々の心のふれあいがあると思う。こういう人と人との出会いを、もっともっと大切にしたいものである。

さらにこの文を書きながら、私は、私に対していろいろ親切にして下さった、多くの人々を想い出した。そして、現在の私はそのような多くの人々の情の上に存在しているのだと思うと、改めて感謝せずにはいられなかった。そして私もできるだけ多くの人々のために力を尽くそうと心に誓ったわけである。

（福生第五小学校長）

棒高跳の瓜生喜蔵君

岩下伴蔵

福生第三小学校から福生中学校に進んだ時、すでに陸上競技では一頭地を抜いていた。昭和三十四年中学三年の時、NHKの全国中学校放送陸上競技大会で、一米七二を跳び優勝し、走高跳で中学生全国一位となった。

国士館高校に進学してから棒高跳を専門科目として選び、昭和三十六年、秋田で行なわれた全国高校陸上競技選手権大会では、二年生の身で三米九〇を跳び三位に入賞した。三十七年十月、大宮での全日本陸上競技選手権大会では、四米二〇を跳び見事当時の高校日本新記録を樹立した（この時まで竹ポール使用）。昭和三十八年三月、東京で行なわれた第三回日本室内陸上競技選手権大会では、高校三年生でありながら、見事四米四〇の室内日本新記録を樹立して優勝し、日本中の陸上競技関係者を驚かせた。

三十八年四月、国士館大学に進学し、九月、大阪での全日本学生陸上競技選手権大会では、四米四〇を跳び優勝し、大学一年生で早くも棒高跳の日本学生チャンピオンとなった。

昭和三十九年の活躍ぶりは、まず五月の国体東京予選で四米六〇のオリンピック標準記録を突破して優勝した。六月の新潟での国民体育大会では四米五〇で二位となった。九月、国立競技場で

のオリンピック最終予選では、再び四米六〇のオリンピック標準記録を突破して三位となったが、惜しくもオリンピック代表の座を今一歩というところで逃がしてしまった。

しかしながら十月八日、オリンピックの聖火が福生町を通過した際、町を代表して聖火リレーに参加した若人の一員となり、正走者としてトーチをかかげてメンバーの先頭を走ったことは皆さん御存知の通りである。

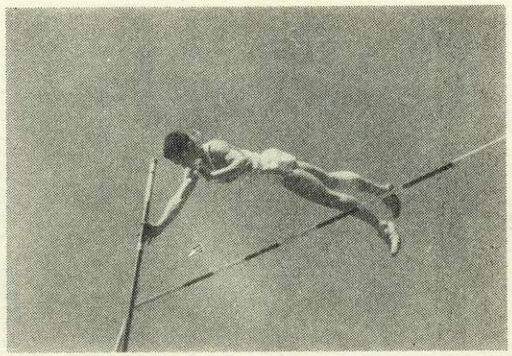
その後の主な成績は次の通りである。

昭和四十一年三月

第一回棒高跳室内競技大会（駒沢競技場）

優勝　四米七〇（室内日本新記録）

昭和四十一年九月



棒高跳　瓜生選手の勇姿

第五十回全日本陸上競技選手権大会（国立競技場）

優勝　四米七〇

昭和四十一年十月

第二十一回国民体育大会（大分）

優勝　四米七〇

昭和四十一年十二月

第五回アジア大会（バンコク）

二位　四米六〇

昭和四十三年六月

記録会

優勝　四米八二

日本全国からみれば本当に小さな福生陸上競技選手権大会にも、毎年喜んで参加するほど何よりも陸上競技を愛し、これに全力を打ち込んでいる瓜生君の姿は誠に尊いものがある。ここに人生を真面目に生き抜いていく一人の人間の姿を見ることができよう。

瓜生君は昭和十九年七月二十六日生の牛浜在住の好青年である。大学卒業後は、東京急行電鉄に入社し、勤務に精励するかたわら、陸上競技にも熱情をそそいでいるわけである。

陸上競技によってきたえられた肉体と精神をもって、瓜生君は人生という競技も堂々と勝ち進んでいくであろう。